

2018 年度

点検・評価報告書
－アセスメント結果の概要－

経済学部

1. 春学期実施科目のアセスメント結果

(1) ミクロ経済学

1. 科目名 ミクロ経済学

2. アセスメント項目

経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる

3. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと

ミクロ経済学では、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる力を養うために、日常の経済問題を理解するために必要なミクロ経済学の基礎理論を学び、またその理論を用いて政策提案を理解し評価する能力を養う。具体的には、需要・供給曲線を用いた市場分析や、基礎的な消費者理論・生産者理論の学習を通して日常の経済問題を理解する力を養成する。また、価格規制や課税といった政策が市場の成果にどのような影響を及ぼすか、政策の実施が経済厚生にどのような変化をもたらすかを学習するなかで、政策を理解・評価する力を養う。その達成度は、中間試験、定期試験において、世の中の出来事が均衡に及ぼす影響を問う問題や、市場価格が消費者や生産者の意思決定に及ぼす影響について考える問題、そして政府の政策が市場の成果にどのような影響を及ぼすか、厚生面でどのような影響がでるか等を問う問題を通して測定する。その結果、成績が B 以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

4. 成績評価の基準

中間試験 35%、定期試験 45%、宿題 15%

5. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか

中間試験や定期試験では、世の中の出来事が均衡に及ぼす影響を問う問題や、市場価格が消費者や生産者の意思決定に及ぼす影響について考える問題、そして政府の政策が市場の成果にどのような影響を及ぼすか、厚生面でどのような影響がでるか等を問う問題を出題し、その点数に応じて成績評価を行った。こうした成績評価で B 以上の成績を修得した学生は、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する基礎的な力を身につけたと考えられる。

6. 成績評価の分布

B 以上 85.4%、C 10.8%、D 1.4%、E、N 2.4%

7. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか

85.4%の学生が B 以上の成績を修めており、多くの学生が、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する基礎的な力を身につけることができた。しかし、残念ながら 14.6%の学生は C 以下の

成績しか修められなかった。今後、宿題や中間試験の点数がふるわなかった学生を教員や SA(Student Assistant)のオフィス・アワーに行くよう促したり、授業内での問題演習の時間を増やし教員が教室を巡回して学生が質問をしやすい環境を作るなどの対策を行い、B 以上の成績を修める学生の割合を高めていきたい。

(2) 経済数学入門 A

1. 科目名 経済数学入門 A

2. アセスメント項目

- ・経済学に必要な数学を使いこなす力を身につける
- ・汎用的なコミュニケーションスキルである説明する力を身につける

3. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと

4～5 人のグループを作り、アクティブラーニングの手法の 1 つであるジグソー法を用いて、予習範囲をグループの仲間同士で教えあうという取り組みを行った。

4. 成績評価の基準

中間試験 (40%)、定期試験 (40%)、10 回の宿題提出 (10%)、授業内での小テストの実施 (10%)、授業内での発言・貢献により Bonus ポイント (最大で 1%)

5. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか

「説明する力」と「経済学に必要な数学を使いこなす力」が身についたのかどうかを確かめるために、本年度の中間試験スコアをもとに出席回数と、17 問テストという経済学部独自の数学能力を診断するテストによって回帰分析を行った結果、身につけているということが統計的に検証できた。詳細は添付資料・碓井(2018)を参照されたい。

6. 成績評価の分布

B 以上 55.2%、C 24%、D 13.5%、E, N 7.3%

7. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか

およそ 55%の学生が B 以上の成績を修めており、これらの学生は「経済学に必要な数学を使いこなす力」と、汎用的なコミュニケーションスキルである「説明する力」を身につけることができたと言って良い。しかしながら、45%の学生は C 以下成績しか修められなかった。特におよそ 21%の学生が D, E, N の評価となっている。

今後の対策として 2 点あげる。第 1 に受講者への適切な情報提供である。受講者に対して、大学の実施しているプレイスメントテストと、経済数学入門 A および B の受講者に対して実施する 17 問テストをもとに、適切なクラス選択ができるよう教員から情報提供を行うつもりである。第 2 に成績の

振るわなかった学生向けの措置として、第 2 セメスターに開講されているミクロ経済学の再履修クラス(齋藤)において、数学や経済学の復習問題を解いてもらうことにより、次年度以降の経済学や統計学関連の科目への橋渡しとしたい。

参考資料

碓井健寛(2018)「経済学に必要な数学を使いこなす力と説明する力はついたのか?—経済数学入門 A(碓井)における中間試験および最終成績の要因分析」【付録 1】

(3) 基礎統計学

1. 科目名 基礎統計学

2. アセスメント項目

統計データを正確に理解することができる

3. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと

基礎統計学は、統計データを正確に理解する力を養うことを主目的としている。特に基礎的な能力として、社会分析における数量データの役割の適切な理解と、統計分析の結果を理解し解釈できる力、Excel を利用して自ら統計データを分析する力を身につけていく。これらの達成度は、統計分析を実践し数量データの適切な理解を確認する宿題、および統計分析の適切な理解を問う中間試験・定期試験により測定する。

以上の達成度の測定によって、成績が B 以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示される理解度およびシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な場合には改善を図る。

4. 成績評価の基準

中間試験 30%、定期試験 40%、演習 10%、Pop Quiz 5%、宿題 15%

5. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか

演習では、与えられたデータに基づき Excel を用いて統計分析を行うことで、授業で学んだ統計分析の理解の定着を確認した。宿題では、授業および演習を通して学んだデータの適切な理解力を確認するために、演習問題の類題を出題し、その点数に応じて成績評価を行った。Pop Quiz は、データの基礎的理解の定着の確認および復習等の授業外学習の実施を促進するため、不定期に実施し、その点数に応じて成績評価を行った。中間試験および定期試験では、データおよび統計分析の適切な理解を問う問題を出題した。これらの成績評価で、B 以上の成績を修得した学生は、統計データを正確に理解する基礎的な力を身につけたと考えられる。

6. 成績評価の分布

S 8.2%、A 24.0%、B 32.1%、C 23.0%、D 5.6%、E,N 7.1 %

7. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか

64.3%の学生が B 以上の成績を修めており、多くの学生が、数量的・統計的データを正確に理解する基礎的な力を身につけることができた。しかし、残念ながら、35.7%の学生は C 以下の成績しか修められなかった。今後は、Excel 操作が苦手な学生へのコンピュータ・リテラシーの履修推奨や、統計分析を用いたレポート作成を成績評価に追加するなどの対策を行い、B 以上の成績を修める学生の割合を高めていきたい。

2. 秋学期実施科目のアセスメント結果

(1) マクロ経済学

1. 科目名 マクロ経済学

2. アセスメント項目

経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる

3. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと

マクロ経済学では、経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析することができる力を養うために、長期、短期の 2 つの視点から、いいかえれば古典派、ケインズ派という対立するアプローチから、マクロ経済学を整理し、各種の政策手段によってもたらされる経済効果の違いを学習した。グラフや数式等を用いた経済理論の学習を通し、論理的に理解し、分析する力を身につけるとともに、現実の統計データに触れることを通じて、数量的・統計的データを正確に理解することができる力を養った。

具体的には、まず基本的な専門用語を正確に理解させることからスタートした。各回の授業において用いられるキーワードについて事前に調べてくる予習課題を課し、また各章が終わるタイミングでキーワードについて小テストを行うことで、専門用語に対する正確な理解度を測定した。

次にマクロ経済理論を論理的に展開し、理解・分析することができる力を身につけられるように、講義内ではグラフや数式等を用いて学習した。そのうえで数値例にもとづいて計算練習をし、学習した内容を論理的に理解し、分析する力が身につけられたかを確認した。

GDP や物価、失業率等の経済変数については計測方法や各種統計量の違いについて学び、計算練習を行った。さらに現実の経済データにもとづいて日本やアメリカ等の経済の動きについて検証した。こうした学びを通じて、数量的・統計的データを正確に理解できる力を養った。

上記の学習プロセスを経たうえで、ほぼ隔週で課される宿題を通じ、ステップ・バイ・ステップに理

論を論理的に組み立ていく力や経済理論の理解度を測定した。

最後に、経済学を用いて社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する力を問う計算問題や記述問題で構成される中間、定期試験を行い、総合的に理解度を測定した。

以上の達成度の測定によって、成績が B 以上の学生は、上記の力の基礎を修得できたと考える。

また、授業評価アンケートで示されるシラバスの到達目標の達成度などによって、授業・成績評価の内容が上記の力の修得に適切であるかを精査し、必要な改善案を考慮した。

4. 成績評価の基準

中間試験 35%、定期試験 40%、宿題 10%、予習課題 10%、小テスト 5%

5. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか
全 6 回の宿題では、理論を論理的に組み立ていく力や経済理論の理解度を測定した。予習課題では各授業で取り扱うキーワードを事前に調べて提出することを課し、各章が終わるタイミングで小テストを実施し、その章で学んだキーワードに対する正確な理解度を測定した。また中間、定期試験では、長期、短期の 2 つの視点からマクロ経済学を整理し、各種の政策手段によってもたらされる経済効果の違いを論理的に理解しているかどうか、またグラフや数式等を用いて経済理論を論理的に理解し分析する力を身につけているかどうかを測るような計算問題や記述問題を出題した。
これら宿題・予習課題・小テスト・中間試験・定期試験の 5 項目での点数を総合し成績評価を行うことで、B 以上の成績を獲得した学生は、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する力を身につけたと考えられる。

6. 成績評価の分布

B 以上 56.8%、C 17.5%、D 11.7%、E,N 14.0%

7. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか

56.8%の学生が B 以上の成績を修めており、過半数の学生が、経済学を用いて、社会現象を複眼的視点から論理的に理解・分析する基礎的な力を身につけることができた。しかし、残念ながら、約半数（43.2%）の学生は C 以下の成績しか修められなかった。

今後、各教員が授業内・授業外の創意工夫を行うとともに、低位に甘んじている中間層への抜本的な対策を講じるため、マクロ経済学に加えて、ミクロ経済学や経済数学入門、International Program 等の状況も把握しながら、学部の中で対策委員会を設置して取り組んでいく。

8. 学生自身は、達成度をどのように評価したか？

Semester 終了時に、この授業が、それぞれの力を身に付けるのに役立ったか、とのアンケートをポータルサイト上で行い、以下の回答を得た。回答数 164（履修者数 206）

日常の経済問題を理解できる

非常に役に立ったと思う 26.2%

多少役に立ったと思う	56.7%
あまり役に立ったと思えない	14.6%
まったく役に立ったと思えない	2.4%

政策提案を理解し評価するために経済理論を用いることができる

非常に役に立ったと思う	24.4%
多少役に立ったと思う	57.3%
あまり役に立ったと思えない	14.6%
まったく役に立ったと思えない	3.7%

社会分析での数量データの役割を理解している

非常に役に立ったと思う	27.4%
多少役に立ったと思う	53.7%
あまり役に立ったと思えない	15.9%
まったく役に立ったと思えない	3.0%

(2) 経済と歴史

1. 科目名 経済と歴史

2. アセスメント項目

- 日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる
- 世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる

3. アセスメント項目の力を学生が身につけるため、授業で行ったこと

経済と歴史では、日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる力を養うために、日本と世界の経済史に関する基本的な概念と知識を学び、その知識をさまざまな経済・社会問題を考えるうえで活用する力を授業内のディスカッションなどで養った。その達成度は、中間試験、定期試験における、基本的事実、概念の理解を測定する問題、および、授業内のディスカッションを踏まえた毎回の授業の後の記述式アンケートへの評価によって測定した。

さらに、同科目では、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を養うために、ミクロ経済学の理論を踏まえたうえで、その理論とは異なる社会科学の諸学説も参照しながら、日本と世界の経済の歴史を学ぶ。そのなかで、参照する理論が異なれば同じ問題でも異なった側面からの考察が可能であることを理解し、さまざまな経済問題・社会問題を複数の複数の学説を持って議論をする力を養成した。その達成度は、中間試験、定期試験において、複数の学説を比較して論じる論述試験によって測定された。

4. 成績評価の基準

中間試験 40%、定期試験 50%、宿題（Web 上での小テスト） 10%

5. 上記のアセスメント項目の力を身につけていたかを測定するために、成績評価は適切であったか
中間試験、定期試験は、ともに問 1、問 2 から校正されている。問 1 では、3 ないし 4 つの文章から正しい文章を選択させる問題を 40 題出題した。これは、日本と世界の経済史に関する基本的な概念を単に覚えるだけでなく、正しい文脈で使用できるかを測るためである。問 2 では、経済史学説を、他の学説と比較して論じることを求める論述問題を出題した。これは、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を測定するためである。

また、毎回の授業の後に Web 上で回答する小テストは、選択式で、授業の講義内容を確認するために行った。

これら中間試験、定期試験、小テストの 3 項目での点数を総合し成績評価を行うことで、B 以上の成績を獲得した学生は、日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる力、および、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を身につけたと考えられる。

6. 成績評価の分布

B 以上 70.7%、C 19.8%、D 4.5%、E,N 5.0%

7. 成績評価の分布は望ましい結果であったといえるか

70.7%の学生が B 以上の成績を修めており、7 割以上のが、日本・世界の経済・社会に関する知識を持ち、活用することができる力、および、世界の多様性、および経済問題・社会問題の多面性を理解し、適切な議論を行うことができる力を身につけたと考えられる。

しかし、残念ながら、3 割の学生は C 以下の成績しか修められなかった。今後、これ等の学生がより効果的に学習を進められるように、日常的な宿題の回数を増やすなどの授業改善を行いたい。

8. 学生自身は、達成度をどのように評価したか？

Semester 終了時に、この授業が、それぞれの力を身に付けるのに役立ったか、とのアンケートをポータルサイト上で行い、以下の回答を得た。回答数 174（履修者数 222）

社会問題を複数の視点から分析できる。

非常に役に立ったと思う	44%
多少役に立ったと思う	52%
あまり役に立ったと思えない	4%
まったく役に立ったと思えない	1%

人類の文化・歴史について適切な知識を持っている。

非常に役に立ったと思う	37%
-------------	-----

多少役に立ったと思う	56%
あまり役に立ったと思えない	7%
まったく役に立ったと思えない	0%

日本の文化・歴史について適切な知識を持っている。

非常に役に立ったと思う	32%
多少役に立ったと思う	59%
あまり役に立ったと思えない	9%
まったく役に立ったと思えない	0%

高い割合で役立ったと応えているが、回答していない学生も多数（48名）おり、今後さらなる分析が必要である。